

いつか解ってくれたなら

林 美奈

「友子さあん。どこ？ 友子さあん」

義母の呼ぶ声で目が覚めた。まだ陽も昇らない午前四時。私は眠い目をこすりながら、カーディガンを着て部屋を出た。

「ここに居ますよ。どうしたんですか？」

「今ね、知らない男の人が私を連れて行こうとしたんですよ。恐くて恐くて。一緒に寝てくれないかしら」

また始まった。義母は夢を見たのだ。三ヶ月前に認知症と告げられた義母は、日に日に行動も言動もおかしくなった。こんなに急に進む病気だとは思ってもみなかった。私も夫もこの三ヶ月の間に、ストレスで胃が傷んだり白髪が増えたりしていた。医者から、「ご家族の方は大変ですが、どうか理解してあげてください」。そう言われていた。本当にその通りで、大変だという事を実感していた。

「大丈夫ですよ。側についていますから、安心して寝てください」

そう言って部屋に連れ出し、義母の横に長座布団を敷いて、横になった。これで何度目だろう。最近ほ、ほぼ一日おきぐらいに起こされては、隣で寝ている日が続いている。夫は疲れて、もう何も言わなくなった。病気のせいだと解ってはいても、やはりイライラして、怒鳴ってしまうのだ。

「もう、お前に任せるよ。俺には無理だ。どんなに理解しようと思っても、俺には出来ない」そう言って、サジを投げていた。まだ三ヶ月しか経っていないのに。私にだって荷は重い。今までの事を想い出すと、100パーセント尽くせるかどうか。実を言うと、私はバツイチで子供二人を連れての再婚だった。義母はそんな私と子供たちに辛くあたり、悔しい想いをさせられてきたからだ。

私が夫と知り合ったのは、今の会社で、私が三十一歳、夫が二十八歳の時だった。夫は十

年近く働いていたが、私は職を転々としていて三度目の転職だった。バツイチで子供も二人抱えていた。そんな夫が、私に一目ボレをして、結婚に至ったのだ。長男の夫との結婚には少し抵抗があった。いずれは両親と同居し、面倒をみなくてはならない。その時バツイチの事や連れ子の事をどの様に言われ、または連れ子に対してどんな態度をされるのか、とても不安だったからだ。だが、夫は、

「大丈夫。俺が三人を守ってやるから。何も言わせないから」

そう言って励ましてくれたので私は踏み切る事にした。この人の両親なら、そんなにイヤな人間でもないだろうと。初めの五年間は別々に暮らしていた。だが、義父が脳卒中で倒れ、入院する事になり私たち四人はやむを得ず、夫の実家に入る事になった。義母は五十八歳で義父は六十一歳だった。田舎の広い土地に建てられたその家に私たちは引越した。子供たちは、小学校六年生と四年生。初めての田舎暮らしと、おじいちゃんおばあちゃんに少しとまどってはいたが、それでも狭いアパートよりはうれしかった様だ。義母も最初の一年間は、病院通いやら何やらで忙しく、あまりいびったりイヤミを言ったりするひまもなかった様だ。だが、義父が退院して、半年後それは始まった。子供たちが二階でドタバタすると下にひびいてウルサイ、とか、お風呂に入っていると声が外にまで聞こえるから近所迷惑だ、とか、何かにつけて子供たちの行動に対し文句を言ってくる。義母の顔は鬼の様な顔に変わっていた。やはりここに来るべきじゃなかった……。私は少しずつ後悔し始めていた。夫は仕事が忙しくなり、残業で帰りがいつも八時頃だった。私と子供たちは、恐い顔をした義母と体の不自由になった義父と夕食を食べた。夫がいない時、義母は余計に私と子供たちに辛くあった。

「食べたらずぐ水に浸さないと汚れが落ちないんだから」

そう言うっては、茶碗をガチャガチャと流し台でボールに浸していた。洗うのは私なんだからいいのに、と思っていたが、私は黙っていた。口ごたえをすると、その後はもつとキツイ事を言われる、そう思ったからだ。子供たちも夫がいない時は、何も言わずさっさと食べて、部屋に戻った。階段の足音すらも文句を言われるため、静かに上がって行った。可哀相に。こんなに子供たちまで神経を使って。私は、自分の事よりも子供たちの事の方が心配だった。このままでは義母に対して憎しみしか抱かないのではないかと。お風呂も一番最後で、義父のアカだらけの後にいつも入っていた。風呂桶でアカをすくいながら。時々「ママあ、一番に入っちゃダメかな？ おじいちゃんの後って、いつもアカが浮いて汚いんだけど……」と長女が言った。

「パパが早い時は一番に入っているよ。今はパパ遅いから、ガマンしてね」

そう言ってガマンをさせた。子供だつて見たいテレビもあれば、宿題もある。早くお風呂に入つて、ゆつくりしたい時もある。充分解つてはいたが、今まで通りにはいかない。それを解つてもらうまで、少し時間がかかった。それから、義母は機嫌の悪い時はドタバタとドアを開け閉めしたり、ガチャガチャと食器を出したりと、イヤな態度ばかりをし続けている。子供たちは年を重ねる毎に、義母を嫌っていた。どうしてこんなイヤな思いしなくちゃいけないの!?と。その度に「ガマンしてね。おばあちゃんもきつと疲れているんだよ」と、なだめていた。そんな子供たちも中学生と高校生になり少しずつ義母の連れ子イジメにも慣れてきた頃だった。

「ママー、最近おばあちゃん変だよ。何かいつも独り言いってて、探し物してる。ボケたのかなあ」

長女が言った。次女も、

「そうそう。アレはどこへやったの? とか、コレを買ってきたはずなのに入っていないとか言つてた」

「そう!? パパに話してみるね。大丈夫だよ。大丈夫」

あれほどイヤな思いをしてきたはずの子供たちが心配していた。夫に話すと、
「ひいばあさんもボケてたからなあ。ないとも言えないよな。病院連れてくか」

そんな話をしている時だった。

「頭が痛くて仕方がないんだけど、病院に連れてってくれるかな」

と義母が来た。グッドタイミングだった。私と夫は、すぐ夜間の病院へ連れて行つた。先生は、脳のCTをとつてみましようと言ひ、少し待つように言われた。義母が出てきた。別室で休ませて、私と夫は先生の話聞く為、診察室に入った。少し暗い顔をして話し始めた。

「お母さんは、認知症です。解り易く言えば、ボケですね。脳のこの部分が委縮し始めています。進行を遅らせる事は出来ても治す事は出来ない病気です。大変だとは思いますが、理解してあげてください。最近、おかしいと思つたのはいつ頃ですか?」

先生は、細かく義母の病状を説明し、私にも家でおかしかった事はないか、いつ頃からそうなったのかを聞いた。夫は下を向いて黙って聞いていた。三十分程、そこで話をした後、義母を連れて病院を出た。私も夫も何も話さなかった。

「どうしたの? 二人とも。そんなに悪かったの? 私の頭は」

義母がケロリとした顔で聞いた。

「たいした事ないってさ。薬は飲まないとダメらしいよ」

夫が説明をした。私は何も言わなかった。これから先の事を考えると、不安だらけで何を

どうすればいいのか全く解らなかった。夫も同じ気持ちだったのだろう。それ以上、義母に何も話さなかった。

その日から、義父に加え、義母の病気に對しても気を使わなければならなくなった。身体は疲れなかったが、神経がすり切れるのではないかと思うくらい、気を使った。それは子供たちも同じだった。顔を合わせると目の色を変え、何だかんだと言いがかりをつける。それが苦痛で部屋にこもりきる様になってしまった。食事も一緒に嫌だと言いつつ、時間をずらして別々に食べた。時には、財布がなくなったと言いつつ、子供たちのカバンの中身を全部調べた事もあった。さすがにあの時は、私も夫も限界だと思った。どこかに預けた方がいいのかなあとか、ヘルパーさんを頼もうか等と話し合っていた。いろんな事がある度、私も子供たちも辛くて、泣いたり苦しんだり後悔したりした。でも、そんな事があっても、ずっとガマンしながら暮らしていた。よく耐えてると子供たちには感謝した。そしてごめんね、と謝っていた。私の再婚のせいで辛い思い悲しい思いをさせてしまつて、と。そんな事をされてきても、子供たちは義母に仕返しをする様な真似はしなかった。「最近はどうなの？ おばあちゃん」とか「ママもパパもあまり無理しないでね。二人の体も心配だよ」等と優しい言葉をかけてくれた。

「家の娘たちは良い子だな。お前の育て方が良かったのかな。悪いな、あんなお袋で。これから大変だと思うけど、頼むな」

夫も私と子供たちの苦悩は解ってくれていた。私は初めて夫に言われたその一言が、すごくうれしくて、今までの嫌な想いも苦労も全て消えてしまった。気がつくと思涙がこぼれていた。

「あれっ？ 泣いてんのか。そんなに俺いいこと言ったかなあ」

夫はそう言いながら、ティッシュを手渡した。結婚してずっと亭主関白の夫は優しい言葉をかけてくれた事は一度もなかった。義母がこうなつて、初めてかけてくれた優しい言葉だった。心の底からうれしかった。私は少し勇気づけられた様な気がした。もう少しがんばってみよう。自分のできる所まで。そして義母がこの先どうなるか解らなくても、ずっと側にいてあげよう、と。だが、そんな想いもつかの間だった。義父が今度は心臓を悪くして入院する事になり、私は毎日、義母を連れて病院へ通う事になった。毎日行く必要もなかったのだが、どうしても心配だから行くと言いつつ、ガソリン代を気にもせず毎日送り迎えをさせられていた。多分一人でいるのが寂しかったのだろう。認知症とは言つても、まだ自分の夫は解っていた。

「早くよくなって退院してきてくださいよ。私はいつも仲間はずれにされて寂しい想いをし

てるんですよ。ご飯だって、ろくに食べさせてもらえないし、本当にイヤな想いをさせられてて、私は悔しいですよ」

ある日、廊下にいると、そんな義母の声が聞こえてきた。私は一瞬、体が固まってしまった。何を言ってるの？ ちゃんと一緒にご飯食べてるじゃない。何でそんなウソつくの？ 気がつくのと、病室に入り、「お義母さん、変な事言わないでくださいよ。お義父さんが本気にするじゃないですか。ちゃんと一緒にご飯食べてるじゃないですか」

泣きながら義母に訴えていた。義母は、びつくりした様な顔をしていたが、すぐに目つきがおかしくなり、

「こうやって、いつも人の話を盗み聞きしてるんですよ。困ったものですねえ、お父さん」と、義父に告げ口の様にした。義父も義母の病気の事は知っていたので、「そんな事言ったら失礼だぞ。友子さんはよくやってくれてるだろう」

と、なだめていた。あまり刺激をするのはよくないとは解っていたものの、つい病気の事を忘れ、義母に怒鳴ってしまった。その時は私も悔しかったのだろう。さすがにガマンできなかったのだ。ある事ない事を言われて。義父も、「すまないなあ。俺もこんな体なのに母さんの事まで面倒かけて。許してやってくれないか。あんな風だけど、昔は優しく働きた者だったんだ。本当に友子さんには申し訳ないと思ってるよ」

そう言って涙ぐんでいた。「いいえ。私は大丈夫です。すいません、お義父さんの具合が悪いのに、とり乱してしまいました。反省してます。ゆっくり治してください。お義母さんの事は心配しないで。また来ますね」

そう言って病室を出た。義母は、義父の顔を見ると満足して家に帰るのだった。そろそろ一週間になる。疲れたあ。近頃、体の限界を感じ始めていた。次女も家に帰って来ても、あまり話さなくなっていた。義母に、

「あの子は私の事をにらみつけるのよね。きっと憎くて仕方ないんでしょうね。怖い怖い」と言われたのがよほど悔しかったらしい。

「私、悪いけどおばあちゃんと、目合わせてないし、にらんでもいないから。いくら病気で、あんなひどい事言うなんて、信じられない」

それ以来ほとんど口もきかず、笑わなくなっていた。長女は部活で遅かった為、あまり義母と接触する事はなかった。夫は両親が病気だという理由で、早く帰してもらっていた。本当に疲れる……。でも、夫にグチをこぼすのは夫を責めてる様で、私はなるべく言わない様に心掛けていた。

一ヶ月後、義父が退院した。これで少しは体を休める事ができる。そう思っていた。ところが、義父が戻ってくると義母は水を得た魚の様になり、前にも増して子供たちや私をいびり始めた。「おとうさんのいない間、すごく偉そうにしたのよ。あの子たちは」とか、「勝手に部屋に入って、何かしてたのよ」とか、とにかくある事ない事を義父に話していた。もう、いいかげんにして!!と、大声でわめきたかった。でも病気なのだ。私は、こぶしを握りしめてグッとこらえた。怒りで頭に血が昇っていった。その時、子供たちがそつと手を握ってくれた。ママ、ガマンだよガマン、とでも言う様に。そうだった。辛い想いをしてるのは、私だけじゃない。子供たちもそうなのだ。私は深呼吸をし、落ち着いた。子供たちに「大丈夫だよ。ごめんね」と言い、部屋に戻るように言った。こんな状態がいつまで続くのだろうか。もういいかげんウンザリしていた。

その後だった。義父が退院したばかりだというのに、心臓発作で亡くなったのは。とにかく慌てたの言うまでもない。義母を抱えての葬儀は、周りが想像する以上に大変だった。本当に疲れた。私と夫はグッタリとしていた。ひと通り事が済んだ頃には二人とも体重が3キロ減っていた。

「疲れたな……。お袋は寝たのか？」
夫がたずねた。

「ううん。まだお義父さんの所にいるみたい。よほど寂しいのね。一人になってしまって。私も、そうなるのイヤだなあ」

「その前に、ボケない事を祈るけどな、俺は」

「そうだね。そうなりたくないね。気をつけるわ、私も」

二人で苦笑いをした。子供たちも疲れたらしく部屋でぐっすりと眠り込んでいた。今までは義父がいたから、少しは話す相手がいて良かったのだが、この先一人になったら誰と話すのだろう。もし、話し相手がいなくなったら余計病気がひどくなるのではないだろうか。そんな不安を抱いていた。今は義父の死に悲しみ落ち込んでいる為、多少は静かになったものの、また元氣になればいろんな事を言われ、大変な想いをしなくてはならない。心の中の悪魔がささやいた。どうせなら、義母の方が先ならよかったのにな、と。そんな事思っちゃいけない。天使が言い返していた。世の中には、死んで当り前という事を口にする人がいるが、そんな事はない。私は一瞬、悪魔の様な事を想った自分を恥じた。

義父が亡くなって一ヶ月くらいは、おとなしくしていた義母が、今度は時間を気にせず動き回ったり、私たちの部屋に入ってきたりした。夫は、

「部屋にカギをつけよう。子供たちの部屋にも。これ以上ひどくなったら何をしでかすか解

らないからな」

そう言って、カギをつける事にした。イヤミを言ったりする事は少しずつなくなってきたが、おかしな事を言う様になっていた。

さつきお父さんが来てね、俺のネクタイを探してくれって言われた、とか。

雨が降りそうだから、お父さんにカサを届けてあげなくちゃ、とか。

義父の死を認めたくないのか、それとも病気のせいなのか。時々哀れだなあと感じてしまう。今までどれだけ私や子供たちに辛い思いをさせてきたか、お義母さんには解る！？と、今なら言えそうな気がしていた。だが今さら、義母にそれを言ったから何なのだ。そう思うと、口に出して言うのはやめた。所詮、病気の義母に何を言っても仕方ない。そこまで私も鬼になる気はなかった。子供たちも少しずつ変わっていった。私と同じ様に哀れに想っているのだろう。一緒に食事をする様になり、優しくしてあげる様になった。今までは、避けてばかりいたのに話しかけてあげる様になり、探し物も一緒にしてあげていた。長女が言った。

「こんな風になると少し同情しちゃうかな。おじいちゃんもないし、余計寂しいんだろうね」

「そうだね。これ以上、病気がひどくならない様にみんなが助けてあげなくちゃね。今までの事は忘れてさ。ママもあなたたちも耐えてきたんだもの。もうおばあちゃんもそんな元気なくなってるだろうし。力を貸して、ママが弱くなってる時は」

長女はオッケーと言って、ニッコリ笑った。夫も、「お前一人だけに苦勞させる気はないから。俺もなるべく協力するよ。お袋も一人になると弱いもんだな」そう言ってくれた。

私はなるべく義母と一緒にいてあげる様にした。買い物にも連れて行き、近くの日帰り温泉にも連れて行った。少しでも解り合いたい。そう思ったからだ。義母は自分の病気の事を知らない。知ったところで、嘆き悲しむだけだ。誰も義母に話そうとはしなかった。このままでいい。皆、そう思っていたのだ。そして、夜中に目を覚ます様になって、私は寝不足気味だった。だが、あれ程悪口を言ったりイヤミを言ったりしていた義母が、まるで子供の様におびえたり私を頼ってきたりすると、それを無視する事は出来なかった。まんざら私も、鬼ではないようだ。お風呂も最近は一緒に入ってあげた。シャンプーとボディソープをよく間違えるからだ。シャワーの温度調節もできず、冷たい水のまま頭からかけて大騒ぎをしていたり、お風呂の栓を抜いてしまったりと、小さな子供と一緒にだった。目を離すと何をしかすか解らない。一度教えても、次には忘れてしまつてまた教える。そんな事の繰り返しだった。これは病気のせいだから、仕方のない事だった。だが夫は、仕事で疲れて帰って来て

家でも疲れるのは辛いと言い、あまり義母とは関わらない様になっていった。夕食の後お風呂に入ると、さつさと二階の部屋にこもり、テレビを見ていた。そして早々と寝た。

私は義母が寝るまで側にいてあげた。やたらと昔の話ばかりしたがった。私にしてみれば昔の話はイヤな事ばかりだったが、義母は何とも思っていないようだ。そういう事も忘れていくんだなあ。せめて一言ぐらい、「あの頃はごめんさいね」と、言っただけだったが、今の義母には無理な話だ。私は、それでも尽くしてあげた。少しでも義父のいない寂しさを忘れさせてあげたいと。義母が眠りにつくと、私はそっと部屋を出て二階に行く。やっと眠れる。そう思ったのもつかの間で、夜中にトイレに起きた義母がカギをかけたものの開けられず、ドアをドンドンたたき大声で私を呼んだ。私が下に降りて行き、説明をしてやっとドアを開ける事が出来た。もうこんな事も何度目だろう。疲れを通り越して、イライラし始めていた。私もやはり人間なんだ。寝られないとそれがストレスになり、イライラする。だが不思議な事に、義母は眠れなくてもイライラしないようだった。ボケると自分が寝たのかすらも忘れるのだろうか。私は体重が減り始めていた。60キロあったのが、この何ヶ月か間に5キロもやせていた。

近所の人たちは、「大丈夫？ 最近疲れてるみたいだけど。お義母さん大変なの？」と心配してくれた。私は、「そうでもないですよ。大丈夫です。心配かけてすみません」と謝っていた。別に謝る必要もないのだが。近所の人たちは、昔から義母の性格がキツイ事を知っていた。だから私の苦労もよく解ってくれていて、「苦労するね。でも、根は悪い人じゃないと思うよ」とか「キツイ事言うけど、仕方ないよ。昔からああいう人だから」等と言っただけは、はげましてくれた。私もそれは充分解っていたので、いつもニコリ笑って、大丈夫ですよ、と答えていた。

もうすぐ五月。暖かくなったら一緒に散歩に行つてあげよう。

「友子さあん。友子さあん、どい？」

また今夜も義母の呼ぶ声がする。